

【報告】

看護大学 2 年生におけるポートフォリオを活用した授業実践

坂田 五月* 佐藤 道子* 石塚 淳子**

* 聖隷クリストファー大学

** 順天堂大学保健看護学部

Investigation of use of portfolio for class performance among second year of nursing students

Satsuki SAKATA, Michiko SATOU, Junko ISHIZUKA

* Department of nursing, Seirei Christopher University

** Juntendo University School of Health Sciences and Nursing

抄録

本研究では、看護大学2年生におけるポートフォリオを活用した授業実践として、ポートフォリオ作成による学習活動への影響を明らかにすることを目的とした。13名の看護学生を対象にフォーカス・グループ・インタビューを2回実施し、質的帰納的に分析した。その結果、ポートフォリオの作成が看護学生の【学習課題への取り組み】における導入活動・展開活動・評価活動に影響を及ぼし、【学習目標の明確化】や目標達成のための【学習方針の決定】を活発化させること、自分のポートフォリオを学習活動に活用することで【学びの価値の確認】が促されることが窺えた。

以上のことから、予習・復習等と自己評価、教授者の指導記録などの授業に関連する資料が綴じられた一冊のファイルを作成し、それを活用することは、看護学生が自己の目標に向かって取り組む主体的な活動を引き起こすきっかけとなることが示唆された。

キーワード：看護学生、ポートフォリオ、授業実践

I はじめに

ポートフォリオとは、その人が目標へ向かう途中のエビデンスが綴じられた1冊のファイル(鈴木、2006)であり、目標に向かって何をどのように行ったのかを可視化したもの、いわゆる数値化できないその人の個性や感性が詰まったひとつの作品である。近年、教育におけるポートフォリオの活用が注目されている。ポートフォリオの活用による学習効果としては、学習やキャリアアップへの意欲を高める効果(灘、2006)、自尊感情の育成を促す効果(川崎、2007)、モチベーションを高める可能性(狩野ら、2007)などが報告され、教育におけるポートフォリオの活用が推奨されている。このように、ポートフォリオを教育に活用した実践報告は複数見られるが、看護専門領域の授業科目における実践報告は少なく、看護学生の学習活動への影響については明らかにされていない。

本稿では、自己の目標に向かって取り組む主体的な学習を促すために基礎看護学の科目でポートフォリオを活用し、看護学生の主体的な学習を促す支援について検討したので報告する。

II 研究目的

看護学部2年生を対象に、基礎看護学の科目でポートフォリオを作成したことによる学習活動への影響を明らかにし、主体的な学習を促す支援を検討することである。

III 用語の定義

ポートフォリオ：本研究では、予習・復習等と自己評価、教授者の指導の記録など、授業関連の資料を整理し、1冊のファイルに綴ること

とする。本研究におけるポートフォリオ作成手順は6ステップから成り立っている(表1)。

学習活動：学習における学習者の主体的な活動であり、導入活動・展開活動・評価活動から構成される(山崎ら、2007)。本研究では、診療に伴う看護方法論Ⅰ(2単位60時間)で自分の学習の傾向や課題を見つけ出し、自己の目標に向かって取り組む主体的な学習とする。

IV 診療に伴う看護方法論Ⅰの授業概要

今回は2007年春期に開講した基礎看護学の科目「診療に伴う看護方法論Ⅰ」でポートフォリオを活用した授業実践を報告する。科目目標は「症状・生体機能管理に必要な基本的な看護介入を身につける」、「看護専門職者としての基本姿勢と態度を身につける」、「症状・生体機能管理に伴うリスクとその回避方法を説明できる」である。科目の特徴は演習と講義と課題から構成されることにある。単元は「生体機能管理」・「臨床検査」・「症状管理」の3つであり、単元の目的、一般目標、演習目標、Key words(課題)を単元毎に示した。「生体機能管理」の概要を表2に示す。

V 研究方法

1. 研究デザイン

本研究では質的記述的研究法を用いた。ポートフォリオ作成についての看護学生の理解、感情、受け止め方等、率直な反応を理解すること、そしてそこから主体的な学習を促す支援を検討することが本研究の目的であり、事象を記述することにより体験を理解する質的記述的研究法が適切と考えたからである。

表1 単元の概要：生体機能管理

生体機能管理	
	講義 (16) 演習 (16) /32時間
I 単元の目的	看護実践に必要な情報を意図的に収集することの重要性を理解し、的確なアセスメント結果を導き出す方法を理解する。また、主体的な学習態度と、看護専門職者に求められる基本姿勢と態度の習得を目指す。
II 一般目標	<ol style="list-style-type: none"> 看護実践に必要な情報と情報を収集するための方法を理解する。 <ol style="list-style-type: none"> インタビューの基本 フィジカルアセスメントの基本 インタビューとフィジカルアセスメントにおける倫理的・文化的・霊的側面への配慮について理解を深める。 主体的な学習活動の重要性を理解する。
III 演習目標	<ol style="list-style-type: none"> インタビューと一般状態の観察から必要な情報を収集できる。 フィジカルアセスメントの技法を駆使して必要な情報を収集できる。 インタビューとフィジカルアセスメントの結果を関連付けてアセスメントできる。
IV Key words	ヘルスアセスメント、フィジカルアセスメント、インタビューのマナー、インタビューの基本技術、アセスメント、基本情報、一般状態の観察、診察の基本技術（視診、聴診、打診、触診）、胸部・腹部・四肢の骨格と臓器の位置関係

表2 ポートフォリオ作成手順

作成手順
① A 4 版ファイル 1 冊を自分で準備する。
② 表紙を作成する。 「科目名」「学生番号」「氏名」は文字の色・大きさ・書体を工夫し、自分らしく作成する。
③ 目次を作成し、インデックスを付ける。 自分の学習活動の軌跡が一目で分かるように工夫する。
④ はじめにを作成する。 自分がこの授業でやり遂げようとしていること「目的（ビジョン）」と「目標（ゴール）」を具体的に記す。
⑤ 単元毎に授業関連資料を整理する。 配布資料、ミニテスト、自己学習資料（Key words など）、授業中のメモや記録物、自分が集めた文献や資料を綴じる。
⑥ おわりにを作成する。 自分がこの授業でやり遂げたことをはじめにの「目的」「目標」と照らし合わせて具体的に記す。

2. 研究参加者

研究参加者はA大学看護学部2年生で2007年度に「診療に伴う看護方法論Ⅰ」を履修した150名。この授業科目では、学生が自分で学習の傾向や課題を見つけ出し、自己の目標に向かって主体的に学習に取り組めるようにポートフォリオを活用した。

3. データ収集期間

ポートフォリオを作成した期間は2007年4月～2007年7月の4か月間であり、データ収集は成績判定後の2007年11月に行った。

4. データ収集方法

データ収集にはフォーカス・グループ・インタビュー法を用いた。フォーカス・グループ・インタビュー（以下、インタビューとする）は「具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論」であり、特定の話題について参加者の理解、感情、受け止め方、考えを引き出すことのできる方法である。インタビューで得られる情報は「他の人々に順応する集団心理よりも、個々の人々が感じた純度の高い情報」とされ、相乗効果性（グループでの相互作用を通して、より広範なまとまったデータが現れる）、安心感（グループが安らぎをもたらし、率直な反応を促進する）のある方法と言われている（Sharonら、1996/井下ら、1999）。本研究では、ポートフォリオの作成につての看護学生の理解、感情、受け止め方等、率直な反応を引き出す必要がある。グループダイナミックスが参加者の率直な反応を促進させ、広範なデータ収集が期待できるため、この方法を用いることにした。

インタビューは、研究者が作成したインタビューガイドを用いて行った。司会者は成績評価に関与しない助手が担当した。グループの大きさは6～7名、インタビューは2組実施

し、ポートフォリオの作成を取り入れた授業科目での学習活動について語ってもらった。インタビュー内容は参加者の承諾を得てICレコーダーに録音し、書記が参加者の反応を記録用紙に記録した。

5. データ分析方法

インタビュー内容は参加者の表情などの反応も含めた逐語録を作成した。逐語録を精読し、ポートフォリオの作成における経験を語っている記述を一つの記録単位としてコード化した。曖昧な文章、矛盾する文章は元データにもどって確認した。研究者間で繰り返し検討を行い、コードのもつ意味内容の類似性や相違に基づいてカテゴリ化し、看護学生の学習活動に与える影響という視点で命名した。分析は質的研究の経験のある複数の研究者で検討し、合意を得ながら行った。

6. 倫理的配慮

対象者に対し、研究者が研究概要、匿名性保障、自由意思、利益と不利益、結果公表、研究以外でデータを使用しない事を口頭と文書にて説明した。研究対象者とは同意書にて同意を確認した。大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅵ 結果

1. 対象者の概要

A大学看護学部2年生150名に対して研究依頼をし、13名から同意を得た。

2. 分析結果

ポートフォリオ作成による学習活動への影響として【学習課題への取り組み】、【学習目標の明確化】、【学習方針の決定】、【学びの価値の確認】の4カテゴリが抽出された。カテゴリを【 】、サブカテゴリを< >、コードを[]、代表的な語り「」、データ番号を（ ）に示す。以

下にカテゴリについて説明する。

1. 【学習課題への取り組み】

このカテゴリは、＜与えられた学習課題に取り組む＞と＜自分の学習課題に取り組む＞と＜仲間と共に学習課題に取り組む＞の3つのサブカテゴリから構成されていた。

1) ＜与えられた学習課題に取り組む＞

＜与えられた学習課題に取り組む＞とは、教員の提示する課題の提出日や成績評価などに動機づけられた学習活動であり、学習に対して受け身の態度で臨む活動である。参加者らは[提出する課題に取り組む]、[評価に関わる課題に取り組む]、[締切日のある課題に取り組む]など、自分の意志で学習課題に取り組むというよりは、[課題を形にする]、[ノルマみたいに課題をこなす]と、教員の提示する課題に対して受け身の態度で取り組んでいた。

参加者Aは「課題というのか何とか先生に提出しなければいけないとか。評価も関わるという事もある、今回は真面目に、診療Iではポートフォリオという形で資料を一生懸命にまとめることができ(18-A)」と、与えられた学習課題に取り組む様子を語った。

そして、参加者Fは「ポートフォリオを作ってみてやっぱりしんどかったというのがあって。何のためにやっているのかというのが今一よく分からなかった(12-F)」と、何のためにやっているのか目的が分からない場合、どのように課題に取り組めば良いのか学習方法が分からない場合に学習に対する負担感の増すことを語った。

2) ＜自分の学習課題に取り組む＞

＜自分の学習課題に取り組む＞とは、自分で発見した学習課題に取り組む学習活動であり、自分の課題について考える、自分で調べる、自分でまとめるという主体的な態度で取り組む活

動である。参加者らは[自分なりに理由を考える]、[自分で図書館に行って調べる]、[パソコンを使って自分で調べる]、[自分で資料をまとめる]、[授業中のメモ書きを自分でまとめる]など、自分の意志で課題に取り組んでいた。そして参加者らの学習に対する興味や好奇心が、[自分の課題を発見する]、[自分で課題を解決する]ことで広がることを語っていた。

参加者Lは「先生がやっている事を考えもしになぞるだけじゃなくて、何で次にこうするのかとか、先生はこうやっているけど“自分はこっちの方がやり易いと思うんだけどどうなのかなあ”とか。そういう事を多少考えながら手順書とか作っていった(110-L)」と、自分の学習課題に取り組む様子を語った。

3) ＜仲間と共に学習課題に取り組む＞

＜仲間と共に学習課題に取り組む＞とは、仲間と学習課題を共有し、共に考える、共に調べる、共にまとめるといった仲間と刺激し合う相互支援の活動であり、学習の質と学習効率を高める活動である。参加者らは[仲間と共に考える]、[仲間と共に調べる]、[仲間と共にまとめる]、[仲間と共に効率良く勉強する]楽しさ、仲間と[分からないところを互いに補う]ことで学習の質と効率が改善されることを語った。

参加者Eは「最初は課題が出た時点で個人で自分のできるところまでまずやってみる。それで次の日とかに話して“自分はここが分からなかったんだけど”というのをみんなに伝える。何人かいるのでその中で“私はここを図書館のこれに載ってたよ”という情報交換をする。それで、“みんなでじゃあ図書館に行ってみよう”とか。図書館で調べた資料を各自提供し合って分からないところをとりあえず補って授業に臨むという形でやっています(64-E)」と、仲間と共に学習課題に取り組む様子を語った。

2. 【学習目標の明確化】

このカテゴリは、＜学習目標を具体的に設定する＞から構成されていた。

＜学習目標を具体的に設定する＞とは、主体的かつ継続的に学習活動に取り組むために、自分の学習状況に合った目標を設定し、目標を達成するための行動を起こすことである。参加者らは主体的かつ継続的に学習活動に取り組むために[資料はその日にまとめる]や[今日中にキーワードをまとめる]という目標を設定し、自分の学習状況に合わせて[自分にとって一番良い資料を探す]、[自分が分かり易い資料を探す]、[きちんとファイルに綴じる]行動を起こした。

参加者Cは「身近な目標みたいなものができた。それを勉強するみたいな。身近な目標ができるから、その目標を達成するために図書館に行ってとか。図書館に行くと色々な本がある。自分にとって一番良い資料が有るかなとか、分かり易いのは有るかなとか。そういうふうに調べて友達とかとも話す(53-C)」と、学生が自分の学習目標を具体的にし、目標を達成するための行動を起こす様子を語った。

3. 【学習方針の決定】

このカテゴリは、＜やる気を引き出す＞と＜自分に合った方法を模索する＞と＜自分に合った学習資源を活用する＞の3つのサブカテゴリから構成されていた。

1) ＜やる気を引き出す＞

＜やる気を引き出す＞とは、学習者が自分の学習の質を高めたいと思うことで、学習における学習者の積極的な活動に繋がる心構えが引き出されることである。参加者らは[自分の学習をより良いものにしたいと思う]、[自分に合った良いものを吸収したいと思う]と、学習の質を高めたいと思う気持ちを語った。そして[自

分で勉強しようと思う]、[自分でまとめようと思う]と、自分の課題に取り組む際の心構えを語った。

参加者Kは「ポートフォリオが自分のおしりをパンパン叩いてくれるような物になっているって感じる。自分で分かり易くまとめていくっていうのも良い勉強になると思う。なので自分に合った良いものを吸収したりして作っていきたいと思います(621-K)」と、ポートフォリオ作成が学習の質を高めたいと思う気持ちを引き出す様子を語った。

参加者Mは「私は追い詰められないと指示されないとやらない。だから(ポートフォリオは)自分が診療Iに対して勉強しようっていう意欲に繋がったし、自分の学習をもっとより良いものにして行きたいと思うようになりました。全部受け身状態だった1年生の頃に比べては自分でやろうっていう意欲に繋がったと思います(615-M)」と、課題に取り組む際の積極的な活動に繋がる心構えが引き出される様子を語った。

2) ＜自分に合った方法を模索する＞

＜自分に合った方法を模索する＞とは、授業ノートのまとめ方を失敗した経験、まとめ方を工夫した経験を基に資料の綴じ方や整理の仕方を模索し、自分に合った方法でファイルに綴じる習慣を作り出すことである。参加者らは[まとめ方の失敗を経験する]、[自分で工夫してまとめてみる]経験から[まとめるコツをつかむ]こと、自分に合った方法を模索しながら[自分でまとめる習慣を作る]ことを語っていた。

参加者Lは「(以前は)授業とかでとった走り書きみたいなメモを書き散らかしているだけだった。けど、それをちゃんとまとめるってことは確かにやってみて意味のある事だなって思った。資料をまとめたりする時に、もっとこ

うしたら見易いんじゃないかなって、そういうのを考えたりするようになったことは良い癖がついたかなって思います (40-L)」と、自分に合った方法を模索する様子を語った。その一方で「ただ単に挟めば良いみたいな考えが途中で出てきてしまった (16-D)」、「キーワードとか時間が無くてただ写しただけみたいになっちゃった時もあった (329-H)」と、自分に合った方法で資料を整理する難しさを語った。

3) <自分に合った学習資源を活用する>

<自分に合った学習資源を活用する>とは、放課後など自分の時間、学生同士のネットワーク、図書館やパソコンなど、自分の学習状況に合った資源を活用して学習する活動である。参加者は授業の予習・復習のために[放課後や自分の時間を活用する]や[休み時間や空き時間を活用する]ようになったことを語っていた。自分の学習状況に合わせて[図書館やパソコンを活用する]、[学生同士のネットワークを活用する]など、学習資源を吟味する、自分に合った資料を探し出すことに時間を活用していた。

参加者Aは「(授業に) 1時間半余りがあると、“ヤバイ、診療やらなきゃ”みたいな感じでファイルをササッと出して“この資料がないんだよね。ここ分かんないんだよね”、“分かったここ”、“私も調べたんだけど無くてさあ”とか言っていた。私はボーッと聞いているだけなんですけれど。それが“ちょっと図書館に行って見に行かない”みたいな感じの時間の使い方になったり、バイトをやって忙しい子とかも、ギューギューにバイトが入っているんだけど“そうだと帰りに図書館に寄って見て行かなきゃ”とか。そういう感じに周りが変わりました (59-A)」と、日々の生活の中に学習時間を捻出するようになったことを語った。

4. 【学びの価値の確認】

このカテゴリは、<知識と技術の結び付きを確認する>と<自分が大切と思う事柄を意識する>と<学びの土台を築く価値を確認する>と<自分で学ぶことの喜びを実感する>の4つのサブカテゴリから構成されていた。

1) <知識と技術の結び付きを確認する>

<知識と技術の結び付きを確認する>とは、演習で分からないことは講義の資料を見て確認し、演習と講義のポイントや知識と技術の関連性に自分で気づくことである。自分のポートフォリオを活用して[やってみて分からないことを自分で確認する]、講義資料を確認する内に[知識と技術のポイントに気づく][知識と技術の結びつきに気づく]ことが表現されていた。

参加者Cは「講義で予め学んだところを演習のほうにもちゃんとうまくポイントが使われている。というか“知識で学ぶだけじゃなくて、その中のポイントを行動で移せるようにうまく流れている”というところが(ふり返りできる)。始めに講義したところを理解しながら、先生が言っていたのはこういうことなんだと、一つひとつ作業をする時(演習の時)にふり返りできる (136-C)」と、ポートフォリオが知識と技術の結び付きを確認するふり返りの手助けとなる様子を語った。

2) <自分が大切と思う事柄を意識する>

<自分が大切と思う事柄を意識する>とは、教員の価値観や成績評価を意識し過ぎるのではなく、自分が落としてはいけない事柄を意識し、大切だと思う事柄にこだわり、それを探求する活動である。参加者の価値観は成績評価を意識した学習から[落としてはいけないと思う事柄を意識する]や[自分が大切と思う事柄を探究する]活動へと変化し、[成績評価を意識し過ぎない]ことを課題として語った。

参加者Jは「1年時の生活援助は演習でもデモを見てそれを見よう見まねで先生に聞いたりしながらやっていた。診療の時の演習は自分でポートフォリオを作った為に自分で何でもなるかって考えて、それは人それぞれで何か違ったりするんですけど。根拠も留意点も自分で考えてこれは本当に大切なんだとか、落としちゃいけないことなんだって思うようになりました(52-J)」と、自分が[落としてはいけないと思う事柄を意識する]重要性を語った。

参加者Aは「ポートフォリオを作っている時は、結構、自分の価値観とか自主的に取り組んでいるというよりは何かやらなきゃいけないとか、言われたからやらなきゃとか。あと先生の価値観を気にしたりしている自分がある。なので、そうではなくて本当に価値のあるものを作りたいから自分で主体性を持って自主的に勉強したいなと思います(271-A)」と、成績評価を意識した学習から[自分が大切と思う事柄を探究する]、自分の価値観に合った学習へと変化する様子を語った。

3) <学びの土台を築く価値を確認する>

<学びの土台を築く価値を意識する>とは、現在の学習活動が将来の職業の土台となること、将来を意識して勉強する重要性や学びの土台を築く必要性を意識することである。参加者は[土台を築く勉強を意識する]、[自分に役立つ勉強を意識する]などの学びの土台を築く必要性と[将来の仕事のための勉強を意識する]、[将来、困らないように勉強する]重要性を語った。

参加者Cは「学んだところの何処を土台にしてどの上に新しい事が乗かっていくというか、そういう事ができるので、一つひとつ、途切れ途切れに物を考えるのではなくて、この上にこれが乗かって、その考えでこれができていくという。先生達が言う基盤、土台ができていな

いとその上に乗っかっていても崩れちゃうよというのがこれ(ポートフォリオ)を通してちょっとだけだけれど分かった気がする(C-134)」と、学びの土台を築く必要性を語った。

参加者Bは「今迄は、テストで良い点というか、正解できればいいという考えで勉強をしていたけれど、これからは将来の仕事の為にという勉強だから、その場その場だけの勉強だと、忘れていたりすると将来困る。だから、ちゃんと1回1回覚えて、それを繋げていくというか、思い出したりしていかないといけないなって思いました(262-B)」と、将来の仕事を意識して勉強する重要性を語った。

4) <自分で学ぶことの喜びを実感する>

<自分で学ぶことの喜びを実感する>とは、学生が自分の過去の学習経験に立ち戻る体験や、他者に認められたりする体験から自分で学ぶことの喜びを実感し、それを表現する活動である。参加者らは[一生懸命まとめたという自負]、[時間を掛けて作ったという満足感]、[毎日必死に作ったという達成感]、[ここまでちゃんとできたという自信]を学ぶことの喜びとして語り、他者承認が学びをより貴重なものとして価値づけること、将来の職業のための学習課題を発見できたことで[学びの方向性が見えてくる]ことを語った。

参加者Gは「自分でまとめた物を持っているとふり返りにもなる。これだけ自分がこんなに一生懸命この時まとめていたっていう物がある。自分は“ここ迄はちゃんとできていた”っていう自信にも繋がる。さっきAさんが言ったみたいに授業がちょっとずつ分かっていく。内容とか聞いていてもこの時間聞いた事はこうだったからこう言いたかったんだっていうのが関連付けて繋がる感じが最近する(635-G)」と、基礎看護学の科目が徐々に分かっていく喜びを語った。

参加者Dは「別にやっている事が無駄じゃないから。無駄だったら“ハアッ”て思うけど。自分が調べてきた事がちゃんとそれで返ってくる。納得というか、提出した時に先生達からのコメントが一言ぐらい有ってそれを見た時に“自分のポートフォリオをちゃんと見てくれるんだ”みたいな。コメントがちょっと嬉しかった（179-D）」と、努力が無駄では無いと思えることに加えて、承認されることが学生の学びをより貴重なものとして価値づけた。

参加者Iは「ポートフォリオを作るようになってから自分でまとめる癖もついたし“分からない事は全部調べよう”っていう意識も高まった。癖になったら分からないのが凄く嫌になってきた。調べた事が直ぐに身に付くわけじゃない。自分で調べたり、自分や友達と必死になって調べた事って凄く覚えている。だから他の授業やっけていても診療でこれからでてきた時も“そうそうこれこうだったな”というのが分かったりした時、“やっけていて良かったな”って思う。そういう癖が付いたり覚えていたりするのが嬉しかった（629-I）」と、他の専門科目との関連性に気づけた時の喜びを語った。

VII 考察

基礎看護学の科目でポートフォリオの作成を経験した13名の学生はポートフォリオ作成を通して学習意欲の高まる様子を表現し、4年生を対象とした授業科目で活用した灘（2006）の報告と類似する結果であった。学習活動が導入活動・展開活動・評価活動から構成される（山崎ら、2007）ことから、ポートフォリオ作成による学習活動への影響を3つの視点で整理し、それぞれの活動を促す支援について考察する。

1. 学習の導入活動への影響

看護学生の学習活動は＜与えられた学習課題に取り組む＞という受動的な活動から始まっていた。そして、与えられた学習課題の中から自分の分からないことを発見する、その新たな発見が学生の興味や好奇心を引き出し＜自分の学習課題に取り組む＞という主体的な活動につながっていった。このことは、ポートフォリオには学習を変化させる可能性があるという齊藤（2007）の見解を支持し、授業においてこの部分は大事なところだから覚えようというメタ学習（佐伯、1985）を促す可能性が窺えた。その理由としては、授業資料を一冊のファイルに綴り整理することで課題の達成状況を自分で確認できる、以前学習した内容と現在学習している内容を照合し、現在との関連性を自分で見つけることができる、目標へと向かう過程を自分でふり返りできることが考えられた。一方、ポートフォリオの作成方法・目的が分からない、資料を綴じる・まとめることへの苦手意識、資料・課題が多い、学習者の受け身の態度、自ら学ぶ必要性を見出せないことが【学習課題への取り組み】の妨げとなっていた。授業資料を一冊のファイルに綴り整理するという課題は、主体的な活動を促すひとつの方法として有効ではある。しかし、学生が課題発見や興味関心の広がりを経験できない場合は、負担感のみが増し、かえって学習の妨げとなると考える。そこで、ポートフォリオを看護専門領域の授業科目で活用する際には、授業概要のオリエンテーションに加えて授業資料の整理の仕方やまとめ方を提示し、作成方法を指導する必要があるであろう。これに加えて、学習の導入活動を促すためには、学生の学習意欲、学習に対するやる気を引き出す学習支援が重要と考える。

2. 学習の展開活動への影響

看護学生の学習は【学習目標の明確化】によってより主体的な活動となり、自らの意志で何をどのように学習すべきかを決定する活動が増して行った。そして、資料をファイルに綴じる・まとめる・整理する方法を模索する経験や自分に合った【学習方針の決定】が、[自分の学習をより良いものにしたいと思う]気持ちを刺激し、学習活動を活発にさせていた。学習方針を決定する過程では、何時、誰と、どこで、どの課題に取り組むのかを自分で決める、学生同士のネットワークを活用する、図書館やパソコンを活用するなど、自分に合った学習資源を自分で選択していた。協調的な人間関係の構築や親密な対人関係の構築・維持等の目標を設定することは、目標の達成に正の影響を与える（上淵、2004）とされ、学生同士の人間関係が学習の展開活動に影響していることが窺えた。授業資料を一冊のファイルに綴じるという課題は、自ら学習するうえで【学習目標の明確化】や【学習方針の決定】を促す。しかし、学習者の学習活動をより活発化させ、展開させるためには学習者間の多様な価値観の共有を促す支援が必要と考える。1・2年生ではこうした経験の浅いこともあり、仲間と学習課題を共有し共に考える・調べる・まとめる、学びを報告し合う等、他者と価値観を共有する学習活動を支援することが重要と考える。

3. 学習の評価活動への影響

看護学生はポートフォリオを作成する中で、自分の知識や価値観に基づいて選択し、自分の学びを創り出す活動、【学びの価値の確認】に積極的に取り組んでいた。そして、現在の学習活動と将来目標とする職業との繋がりや、土台を作ることの重要性を意識するようになり、[将来の仕のため勉強する]という職業志向を

高めていった。一方、職業選択に対する不安や今後の学習の見通しの立たない不安定な状況下では学ぶことの価値を見いだせず、学習目標を見出せないでいることも窺えた。

齊藤（2007）は、学生が「学習目標」や「自己評価」を言語化できないことを理由にポートフォリオの活用の限界を述べており、これと類似する結果であった。このことは、学習者の学習姿勢や専門科目のイメージの難しさが影響していると考えられ、現在の学習活動と将来の職業との繋がり意識化を促す必要性があることが推察された。ポートフォリオには自己成長の自覚や経験の再構築を促す効果があると言われているように（灘、2006）、ポートフォリオを活用して現在と過去の変化から成長を自覚する評価活動、現在と過去を関連付けて考える予測活動を支援することが重要と考える。

以上のことから、予習・復習等と自己評価、教授者の指導記録等の授業関連資料を一冊のファイルに整理し綴じるポートフォリオの作成は、学習における導入活動・展開活動・評価活動に正の影響を与えると推察され、看護学生の主体的な学習を促す方法であると考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題は、基礎看護学の授業科目におけるポートフォリオの効果的な活用方法を検討することであり、学生が自分の学習目標を明確化する活動、自分に合った学習方針を決定する活動、自ら学ぶ価値を確認する活動における支援を検討することである。

文献

狩野京子、曾田美佐子、三成富美江、他2名
（2007）モチベーションアップと組織力向上のための「ポートフォリオを活用した目標管

- 理」の検証, 日本看護学会論文集看護管理37, 373-375.
- 川崎ひろか (2007) 小学校におけるポートフォリオの広がり, 看護教育, 48 (1), 24-30.
- 灘久代 (2006) [ポートフォリオ]の活用とその考え方を導入した評価の一方法, 看護教育, 47 (5), 440-444.
- 佐伯胖編 (1985) 理解とは何か, 155-156.
- 齊藤里果, 倉本アフジャ亜美, 丸山仁司 (2007) 授業における学生自己評価シートの導入, 理学療法科学, 22 (3), 379-383.
- Sharon Vaughn, Jeanne Shay Schumm & Jane M. Sinagub (1996) Focus Group Interviews in education and psychology: 井下理, 田部井潤監訳 (1999) グループ・インタビューの技法, 慶応義塾大学出版, 東京, 7-28.
- 鈴木敏恵 (2007) ポートフォリオが変える - 与えられる学びから意志ある学びへ -, 看護教育, 48 (1), 10-17.
- 上淵寿 (2004) 動機づけ研究の最前線, 北王路書房, 東京, 100.
- 山崎英則, 片上宗二 (2007) 教育用語辞典, ミネルヴァ書房, 東京, 61.